

広島県立文書館の角筆文献に見られる音韻的特徴について

— 二〇一六年から二〇一八年の調査に基づいて —

柚木 靖史

本稿は、広島県立文書館において、二〇一六年から二〇一八年度にかけて行った角筆調査により新たに確認された角筆文献の報告と、角筆に基づいて分かった安芸・備後地方の方言事象について、音韻の観点から考察したものである。⁽¹⁾

調査対象文献は、広島県立文書館所蔵の保田（義郎）家文書（広島城下京橋町⁽²⁾）と平賀家文書（賀茂郡上保田村（東広島市黒瀬町）⁽³⁾）と山名家文書（備後国芦田郡）⁽⁴⁾と福原家文書（賀茂郡重兼村）⁽⁵⁾のうち、近世から明治にかけて刊行された和綴本（漢籍）である。

調査者は、本稿の筆者と、筆者が担当する授業を受講した学生諸氏である。調査日時は、二〇一六年十二月から二〇一八年三月までの期間である。角筆の確認は主に学生諸氏が行い、筆者はその後、約一か月かけて、角筆の解説に関わるフォローアップ調査を行った。なお、この調査は大学で開設された授業の一環として行われたもので、角筆の探し方をはじめ、角筆調

査の方法などについて、筆者が指導し、実地の体験をとおして学ぶという内容である。

一 確認された角筆文献

〔平賀家文書〕（賀茂郡上保田村〔東広島市黒瀬町〕

〔59〕倭点小学 内篇 一冊（8803・10140）

江戸時代中期板 袋綴装 縦26・0×横18・5 墨書書き入れ

なし 山崎嘉点

確認日 平成28年12月26日

（表紙見返・墨書）平賀為夫 平賀氏什物

（角筆情報）角筆少なし。「不嘯」の「嘯」の右傍に「イさ」と

あり。墨書では「イサケ」とあり。「嘯」の訓。（30

丁表4行目）

(60) 春秋 一冊 (8803・10143)

江戸時代享和年間板 袋綴装 縦25・8×横18・0 墨書書き入れなし

(版心記) 享和再刻

確認日 平成28年12月26日

(後表紙見返・墨書) 平賀什物

(後表紙・墨書) 平賀敏夫 平賀

(角筆情報) 角筆少なし。「罍ム」の「罍」の右傍に「カコ」とあり。印刷された「ム」と合わせて「カコム」と読む。(40丁表5行目)

(61) 評苑改点 文選傍訓大全 九冊 (8803・10382)

江戸時代元禄十一(一六九八)年板 袋綴装 縦28・0×横19・0 墨書書き入れあり

確認日 平成28年12月26日

(刊記) 元禄十一寅歳九月吉辰／書肆／播州大阪住 大田権右衛門／京三条通中嶋町 辻勘重良

(角筆情報) 角筆少なし。「鴟」のある行の上欄外に「シ」とあり。「シ」は、「鴟」の音か。(巻之二 7丁裏)

(62) 大学章句 一冊 (8803・10760)

江戸時代後期板 袋綴装 縦24・0×横18・0 墨書書き入れ

なし

(版心記) 北村蔵

確認日 平成28年12月26日

(刊記) 正本再刻 改正四書集註／男師周校訂

(後表紙見返・墨書) 平賀氏什物

(角筆情報) 角筆少なし。上欄外に「走」とあり。本文の対応箇所不明。(1丁表5行目)

(63) 蒙求 三冊 8803・10982・10984

江戸時代天和二年(一六八二)板 袋綴装 縦25・0×横18・0 墨書朱書書き入れあり 朱印「賀茂県 平賀氏蔵書 黒瀬荘」あり

確認日 平成29年1月5日

(刊記) 天和二壬戌之歳三月日

(第一冊目・表紙見返し・墨書) 平賀氏

(第二冊目・卷末・墨書) 平賀氏什物

(第三冊目・表紙見返し・墨書) 黒瀬荘 平賀氏

(角筆情報) 角筆少なし。本文の「偶ヒヲ」の右傍に角筆で「タク」とあり。印刷部分と合わせて「タクヒヲ」と読む。(第一冊目・序・3丁表5行目)

(64) 新刻改正 論語 再刻後藤点 四冊 8803 113

77511380

江戸時代後期板 袋綴装 縦24・0×横17・8 墨書書き入れあり

確認日 平成29年1月5日

(版心記) 北村蔵

(第一冊目・表紙見返し・墨書) 平賀氏什物

(第二冊目・表紙見返し・墨書) 平賀氏什物 迅夫

(第三冊目・卷末・墨書) 平賀屋 裕吉/平賀氏什物/迅夫/溪

吉

(第四冊目・表紙見返し・墨書) 平賀氏什物 迅夫

(角筆情報) 角筆少なし。本文の「哭シテ」の「哭」の右傍に

「コク」とあり。(第二冊目 卷六 3丁表6行目)

(65) 新刻改正 孟子 再刻後藤点 二冊 8803 113

8111382

江戸時代後期板 袋綴装 縦24・0×横17・5 墨書朱書書き入れあり

確認日 平成29年1月5日

(第一冊目・表紙見返し・墨書) 迅夫 平賀氏什物

(第二冊目・後表紙見返し・墨書) 戒善町 安達周澤 十一月

リ孟子会業/迅夫

(第二冊目・後表紙見返し・墨書) 天保三年 壬辰秋自九月 於

百千堂開之/同十有一日

リ孟子会業始大学校教授

(第二冊目・卷末墨書) 平賀氏

(第二冊目・後表紙見返し・墨書) 上保田 平賀

(角筆情報) 角筆少なし。本文の「負戴」の「負」の右傍に

「フ」とあり。「フ」は「負」の音。(第一冊目 卷

一 5丁表6行目)

(66) 新刻改正 孟子 再刻後藤点 一冊 8803 113

83

江戸時代後期板 袋綴装 縦24・0×横17・5 墨書書き入れあり

確認日 平成29年1月5日

(版心記) 北村蔵

(表紙見返し・墨書) 安定静

(後表紙見返し・墨書) 芸陽広陵 安定静 芸州安定之

(角筆情報) 角筆少なし。本文の「陋巷」の右傍に角筆で「ロカ

ウ」とあり。「ロウカウ」を「ロカウ」と短呼した

ことを示す例の可能性あり。なお「巷」の音「カ

ウ」は、開合が一致している。(巻一 31丁裏5行

目)

- (67) 新刻改正 孟子 再刻後藤点 五冊 8803 113
84511388
江戸時代文久元年(一八六一)板 袋綴装 縦24・0×横17・
8 墨書きき入れあり 朱印「賀茂県 平賀氏蔵書 黒瀬荘」
確認日 平成29年1月5日
- (版心記) 北村蔵
- (刊記) 右 文久元年酉年三月十日 九日蒙 官許蔵版之畢 日野
耕作 良輔
- (第一冊目・表紙見返し・墨書) 平賀迅夫什物
(第一冊目・後表紙見返し・墨書) 平賀迅夫
(第三冊目・表紙・墨書) 平賀剛吉
(第四冊目・表紙見返し・墨書) 平賀為吉
(角筆情報) 角筆少なし。本文の「魚塩」の「塩」の右傍に角筆
で「エン」とあり。(第一冊 巻四 33丁表3行
目)
- (68) 新刻改正 論語集註 四冊 8803 113891
1392
江戸時代後期板 袋綴装 縦25・5×横17・5 墨書きき入れ
あり 朱印「賀茂県 平賀氏 黒瀬荘」あり
確認日 平成29年1月5日
(第二冊目・表紙・墨書) 小山
- (第二冊目・後表紙見返し・墨書) 平賀為吉
(角筆情報) 角筆少なし。本文の「如カ不」の「如」の右傍に角
筆で「シ」とあり。(第二冊 巻三 17丁表5行
目)
- (69) 新刻改正 大学章句 全一冊 8803 11393
江戸時代後期板 袋綴装 縦25・5×横17・5 墨書きき入れ
あり 朱印「平賀剛吉」「賀茂県 平賀氏蔵書 黒瀬荘」あり
確認日 平成29年1月5日
(表紙見返し・印刷) 正本大字新刻/校正定本/改正 四書/東
都書房 錦森堂梓
(表紙見返し・墨書) 賀茂郡 上保田村 平賀剛吉 書本
(角筆情報) 角筆少なし。上欄外に角筆で「シ」とあるが、本文
の対応箇所は不明。(9丁裏8行目 上欄外)
- (70) 中庸集略 巻上 二冊 8803・11397113
97
江戸時代中期板 袋綴装 縦27・8×横19・5 朱書きき入れ
あり
(版心記) 倭点四書 山崎嘉点
確認日 平成28年12月27日
(角筆情報) 角筆少なし。「惇読」とある行の上欄外に「ケイ」

とある。「ケイ」は「惺」の音。(巻上 21丁裏9
行目)

(71) 大学或問 一冊 8803・11398

江戸時代中期板 袋綴装 縦25・9×横18・8 墨書・白書書
き入れあり

確認日 平成28年12月27日

(表紙見返し・墨書) 黒瀬庄／平賀氏

(角筆情報) 角筆少なし。「求ム 知ルコトヲ」とある行の上欄外
に角筆で「シ」とあり。印刷部分に「ルコトヲ」と
あるので、角筆で「シ」を補い「シルコトヲ」と読
ませたのであろう。

(72) 文選 六冊 (8803・11505) 11510)

江戸時代中期板 袋綴装 縦26・4×横19・0 墨書・朱書書
き入れあり

確認日 平成28年12月27日

(後表紙見返し・墨書) 耶蘇 菅田氏什物 菅田忠夫什物 菅田

氏忠夫

菅田 美原(第四冊目)

芸(朱書) 菅田氏(墨書) 菅田村

(朱書)(第五冊)

菅田氏(第六冊目)

(刊記) 華洛二条通衣棚角 風月左衛門 蔵版

(角筆情報) 角筆による区切り線あり。

(73) 論語古訓 全 一冊 (8803・11512)

江戸時代元文四(一七三九)年板 袋綴装 縦26・9×横18・
0 朱書書き入れあり

確認日 平成28年12月27日

(刊記) 太宰弥右衛門撰／元文四年己未夏五月吉／江都書肆嵩山
房蔵板／須原屋新兵衛

(角筆情報) 角筆少なし。「岡」とある行の上欄外に角筆で「モ」
とあり。口頭表現を反映して、「モウ」を「モ」と
短呼した可能性あり。

(74) 新板校正 孟子 林道春点 三冊 (8803・1151

6) 11518)

江戸時代中期板 袋綴装 縦26・0×横18・3 墨書書き入れ
なし 朱印「賀茂県 平賀氏蔵書 黒瀬荘」あり

確認日 平成28年12月27日

(版心記) 森氏版

(表紙見返し・墨書) 黒瀬 藤波園／藤波園什物 月観園／菅田村

大原屋(卷三)

平賀氏(巻四)

黄鳥喜春来 上保田邑 平賀/平賀氏(巻

四)

(巻頭・墨書) 凡紙数/十八枚/孟子(巻七)

(巻末・墨書) 平賀氏(巻四)

井上氏 暢氏什物(巻七)

(後表紙見返し・墨書) 天保五年 藤浪園什物 甲辰七月(巻

三)

平賀氏/平賀来治(巻七)

(角筆情報) 角筆少なし。「子路」とある行の上欄外に「シ」とあり。「シ」は「子」の音か。(巻三 18丁表4行目) 他に角筆の線あり。

(75) 頭書 莊子 8803・11521~11530 十冊

江戸時代寛文五年(一六六五)板 袋綴装 縦27・3×横19・

5 墨書・朱書書き入れあり

確認日 平成29年1月13日

(刊記) 寛文五乙巳歳孟秋吉祥日/風月庄左衛門 開板

(第一冊目・巻末・墨書) 梅村之賜也/梅漢義

(第二冊目・後表紙見返し・墨書) 此梅漢陳人藏書/而梅邨所贈

也

(第三冊目・後表紙見返し・墨書) 此梅村御恵也/梅義

(第四冊目・後表紙見返し・墨書) 梅漢所藏

(第五冊目・後表紙見返し・墨書) 此梅邨兄所恵也/梅漢陳之

(第六冊目・後表紙見返し・墨書) 是梅村所恵/梅漢藏

(第七冊目・後表紙見返し・墨書) 是梅漢藏書也/梅村生所恵也

(第八冊目・後表紙見返し・墨書) 是梅兄所恵 而竺梅漢之藏也

(角筆情報) 角筆少なし。角筆で「二」「三」の漢数字を角筆で

書き入れる。返り点か。本文の「焉如」の「焉」と

「如」の間に角筆で「二」とあり。(第一冊目 巻一

22丁表2行目)

(76) 書経集註 8803・11531・11532・1153

3 三冊

江戸時代明暦元年(一六五五)板 袋綴装 縦28・0×横19・

2 墨書書き入れあり

確認日 平成29年1月13日

(刊記) 明暦元年冬下旬/風月庄左衛門

(角筆情報) 角筆少なし。不審紙の上から角筆を書き入れる。本

文の「惑」の右に不審紙あり。その上に角筆で

「三」とある。(巻二 3丁裏6行目)

(77) 補註 孔子家語 五冊 8803・11534~115

43

江戸時代寛保元年（一七四二）板 袋綴装 縦27・5×横18・

8 墨書書き入れなし

確認日 平成29年1月13日

〔版心記〕 風月堂蔵

〔刊記〕 寛保元辛酉歲十二月之吉／京師書坊／風月堂 莊左衛門

重梓

〔表紙見返し〕 龍洲先生校定／補註 孔子家語／風月堂主人 澤

文拱謹識

〔角筆情報〕 角筆少なし。上欄外に角筆で絵のような線あり。

〔第1冊 卷一 17丁表〕

〔保田（義郎）家文書〕（広島城下京橋町）

〔78〕官板 四書大全 論語 二十一冊 360・1～21

明治板 袋綴装 縦28・0×横20・4 墨書書き入れなし

確認日 平成29年1月13日

〔刊記〕 徐九一太史訂正／四書大全／金閨五雲居蔵版

〔角筆情報〕 角筆少なし。角筆の線が細く、かつ凹みが浅いため、

多くの角筆は判読不能。「スヘ」（巻一 1丁表1行

目 上欄外）とあるが、本文との対応箇所不明。

〔79〕新版 校正 易経 乾坤 書経 上下 春秋 全 礼記 一

四 九冊 371・40～48

江戸時代後期板 袋綴装 縦26・0×横19・0 墨書書き入れ

なし

確認日 平成29年1月13日

〔角筆情報〕 角筆少なし。「逐逐タリ」の「逐異」に「チク」と

あり。（27易経 乾 卷上 19丁裏2行目）。「天

殃」の「殃」に印刷で「アフリ」とあるのに対し

て、角筆で「天ヲ、」とある。「アフ」を「ヲ、」

とするのは、開合の乱れを示すか。（礼記 二 2

丁裏4行目）

〔80〕倭版四書 孟子集註 四冊 405・12～15

江戸時代中期板 袋綴装 縦27・9×横19・0 墨書書き入れ

なし

確認日 平成29年1月13日

〔版心記〕 山崎嘉点

〔刊記〕 皇都書林／大坂／村上右衛門／武村市兵衛／同姓佐兵衛

〔角筆情報〕 角筆多し。本文の「韓子」の「韓」の右傍に角筆で

「カン」とあり。（第一冊 序2丁裏2行目）

〔81〕尚書 六冊 405 51～56 六冊

江戸時代寛延四年（一七五二）板 袋綴装 縦26・8×横18・

1 墨書書き入れなし

確認日 平成29年1月13日

(刊記) 寛延四年辛未春三月／皇都書林／丸屋市兵衛／今村八兵衛／風月莊左衛門／梓行

(角筆情報) 角筆少なし。本文の「開設」の「設」の右傍に角筆で「セツ」とあり。(第一冊 序2丁表5行目)。
本文の「漾」の右傍に角筆で「ヨ」とあるのは、「漾」の音である「ヨウ」を短呼した可能性あり。

〔山名家文書〕(備後国芦田郡)

(82) 天保校正 孟子 道春点 四冊 199412 慳貪1

1 43・44・45・46

確認日 平成29年12月26日

江戸時代天保九年(一八三八)板 袋綴装 縦25・1×横18・

1 墨書書き入れあり

〔山名図書〕印あり

(刊記) 赤澤太一郎先生改点／寛政五年癸丑四月／文政七年甲申三月補正／天保九年戊戌十一月再販／京都書林／河合氏

梓／俵屋清兵衛

(角筆情報) 角筆少なし。第一冊二丁表上欄外に「モ」などの仮名があるが、本文の漢字との対応関係等、不明であ

る。

(83) 大学章句 一冊 119412 慳貪11 54

確認日 平成29年12月26日

江戸時代中期板 袋綴装 縦27・0×横19・0 墨書書き入れあり 〔山名図書〕印あり

(後表紙見返し) 亥之年 文政十年

(後表紙) 保里入

(角筆情報) 角筆少なし。序3丁表7行目に「支流餘」の「支」の右傍に「シ」、「餘」の右傍に「ヨ」と角筆で書かれる。「シ」は「支」の音、「ヨ」は「餘」の音。

(84) 改正再刻 孟子 道春点 三冊(卷二・三 卷四・五

卷六・七) 201404 46・47・48

江戸時代寛政四(一七九二)年 袋綴装 縦26・0×横18・4

墨書書き入れあり

確認日 平成29年12月26日

(第一冊目・表紙見返し) 山根栄吉／十八日／山根栄吉事／聖賢孟子所謂学文之道無他求放心而已

都之勉教人

(第一冊目・後表紙見返し) 土方 のむら 野村

(第一冊目・後表紙) 安芸国 芸州 安芸郡上瀬野村 一貫田

土方 頼道

(第二冊目・表紙見返し) 明治十四年六月二十三日

言語ハ不可有慎マスニハ矣

明治十四年第四月

(第三冊目) 放心求之遠而已

(第一目・刊記) 天明丙午 孟春之月 平安書坊 竹林堂梓

寛政四壬子秋九月 河内屋喜兵衛

(角筆情報) 角筆少なし。

(85) 中庸章句 一冊 201404・49

江戸時代後期 袋綴装 縦26・2×横18・4 墨書書き入れなし

確認日 平成29年12月26日

(角筆情報) 角筆で「一」「二」などの返り点書き入れられて

いる。

〔福原家文書〕賀茂郡兼次

(86) 首書四書 集註中庸章句 一冊 920117

江戸時代後期板 袋綴装 縦26・1×横18・3 墨書・朱書書

き入れあり

確認日 平成30年1月12日

(表紙) 福原稲造

(表紙見返し) 明治十三年六月九日包之

(後表紙) 福原蔵本

(角筆情報) 「柔スルトキハ」(四十七丁表7行目)の「柔」の右傍

に「シウ」とあり。「しう」は「柔」の音。

(87) 孟子 道春点 四 一冊(巻十一・十二・十三・十四)

9201・807

江戸時代正徳四年(一七一四)板 袋綴装 縦25・0×横18・

4 墨書朱書書き入れあり

確認日 平成30年1月12日

(表紙) 山根咬芝

(後表紙見返し) 福原蔵本 隣静

(後表紙) 福原蔵書

広島県賀茂郡重兼里庄／福原蔵書

字子求

(刊記) 正徳四年甲午五月穀旦／北村四郎兵衛 開板

(角筆情報) 角筆少なし。以下に主な用例を示す。

「告子章句ノ上」(1丁表3行目)の右傍に「コウシ

シヨウク上」とあり。「告子章句」の音。

「暴ヲ好ミヌ」(5丁表10行目)の左傍に「ボウ」と

あり。「暴」の音。

「象」(5丁裏1行目)の上欄外に「シヨウ」とあり。「象」の音。

「口腹」(15丁表3行目)の右傍に「コウフク」とあり。「口腹」の音。

「洿水」(30丁表6行目)の「洿」の右傍に「コウ」とあり。「洿」の音。

「甘ンス」(44丁表7行目)の「甘」の右傍に「カン」とあり。「甘」の音。

「欲スレ短フセント」(46丁裏3行目)の「短」の右傍に「ミジコウセント」とあり。「短」の訓。

(88) 新板大字古文真宝 一冊 9201/808

江戸時代中期板 袋綴装 縦26・6×横18・6 墨書書き入れなし

確認日 平成30年1月12日

(元の刊記) 延宝三乙卯歳二月吉日/吉田四郎右衛門板行

(角筆情報) 角筆多し。「無妄」(1丁表3行目)の「妄」の右傍に「ホフ」とあり。「妄」の音。

(89) 孟子 二冊 9201/809

江戸時代中期板 袋綴装 縦25・0×横18・0 墨書書き入れあり

確認日 平成30年1月12日

(後表紙見返し) 福原稲造有

(角筆情報) 角筆少なし。「授」(1丁表2行目)の右傍に「サズク」とあり。四つ仮名の乱れの例と考えられる。

(90) 孟子 二冊 9201/810

江戸時代初期板 袋綴装 縦26・0×横18・0 墨書・朱書書き入れあり

確認日 平成30年1月12日

(表紙) 気湯 助次郎

(表紙見返し) 福原稲造

(角筆情報) 角筆少なし。七丁裏から八丁表の上欄外に「ウ」

「アン」「ソク」のような仮名あり。本文の読みを記したと思われるが対応箇所は不明。

(91) 書経 一冊 9201/811

江戸時代中期板 袋綴装 縦25・4×横18・4 墨書・朱書書き入れあり

平成30年1月12日

(表紙) 君子万年 福録綴之 福原稲造

(角筆情報) 角筆の書入れ少なし。「放勲」(1丁表2行目)の右傍に「ホフクン」とあり。「放勲」の音。

(92) 新刻易经 一冊 9201/830
江戸時代後期板 袋綴装 縦25・0×横18・4 墨書書き入れあり

確認日 平成30年1月12日

(表紙見返し) 福原様

(巻末) 安政七年申三月八日初メル 之は廿二日より十五日ブリ

二

福原利常本二／芸州賀茂郡高屋組重兼村福原氏利常本

(角筆情報) 角筆の書入れ少なし。「行」(27丁裏1行目)に「ユ

キ」の仮名あり。「行」の訓。

(93) 新刻易经 一冊 9201/831

江戸時代後期板 袋綴装 縦25・6×横18・2 墨書書き入れあり

確認日 平成30年1月12日

(版心記) 新刻改点

(表紙見返し) 安政七年庚申三月八日上ル之 土居勝二

(後表紙見返し) 安政七年 末六月十三日来之 土居勝二本

(角筆情報) 角筆の書入れ少なし。「窯ク」(3丁裏4行目)の右

傍に「ヤク」とあり。「窯」の訓。

(94) 論語 一冊 9201/814

江戸時代初期板 袋綴装 縦27・2×横18・2 墨書書き入れあり

確認日 平成30年1月12日

(角筆情報) 角筆の書入れ少なし。7丁の上欄外に「去」とある。

対応箇所不明。

(95) 孟子 一冊 9201/833

江戸時代中期板 袋綴装 縦27・2×横20・0 墨書朱書書き入れあり

確認日 平成30年1月12日

(表紙見返し) 福原藏本 福原郁藏本

(角筆情報) 角筆の書入れ少なし。18丁表の上欄外に「シ」とあ

る。対応箇所不明

二 保田(義郎)家文書の角筆文献にみる音韻的

特徴

今回発見された角筆文献には、角筆の書き入れが多いものもあれば、上欄に数か所だけ文字を書き入れただけのものもある。また、線だけを書き入れたものもある。ここでは、角筆の書き入れが最も多い保田(義郎)家文書の角筆文献の「孟子集註」(文献番号26)⁽⁶⁾と「倭版四書孟子集註」(文献番号80)を対象に

して、角筆の書き入れから分かる音韻的特徴について記述する。

(1) 開合について

ここでは、開合の問題を取り上げる。以下に掲げるように、保田(義郎)家文書の角筆文献「孟子集註」(文献番号26)と「倭版四書 孟子集註」(文献番号80)からは、開合に関する多くの用例を拾うことができる。以下、「開音を合音にした例」「開音を開音にした例」「合音を開音にした例」「合音を合音にした例」に分けて、用例を示す。

① 開音を合音にした例

- | | | | |
|----|--|----|--|
| 1 | 合従連衡「シヤウレンコウ」(26孟子 序2丁表4行目)・「衡」は本来「カウ」 | 6 | 陋巷「ロウコウ」(26孟子 序5丁表5行目)・「巷」は本来「カウ」 |
| 2 | 唐虞「トウタ」(26孟子 序2丁表5行目)・「唐」は本来「タウ」 | 7 | 衡行「コウ」(26孟子 卷一 32丁表4行目)・「衡」は本来「カウ」 |
| 3 | 郊閑「コウクハン」「コウカン」(26孟子 30丁表8行目)・「郊」は「カウ」 | 8 | 辞讓「ジジヨウ」(26孟子 卷二 20丁表3行目)・「讓」は本来「ジャウ」 |
| 4 | 境「キヨウ」(26孟子 30丁表7行目)・「境」は本来「キヤウ」 | 9 | 耕稼陶漁「コウカトウ」「トウキヨ」(26孟子 卷二 23丁表6行目)・「耕陶」は本来「カウ」「タウ」 |
| 5 | 商鞅「ヲウ」(26孟子 序 2丁表2行目)・「鞅」は本来「アウ」 | 10 | 輔行「フコウ」(26孟子 卷二 33丁表2行目)・「行」は本来「カウ」 |
| 11 | | 11 | 耕「コウ」(26孟子 卷二 55丁裏7行目)・「耕」は本来「カウ」 |
| 12 | | 12 | 暢茂「チヨウボ」(26孟子 卷二 32丁裏8行目)・「暢」は本来「チャウ」 |
| 13 | | 13 | 皜皜「コウ」(26孟子 卷二 60丁裏2行目)・「皜」は本来「カウ」 |
| 14 | | 14 | 陋巷「ロウコウ」(26孟子 卷三 40丁表8行目)・「巷」は本来「カウ」 |
| 15 | | 15 | 考妣「コウヒ」(26孟子 卷三 52丁裏9行目)・「考」は本来「カウ」 |
| 16 | | 16 | 將軍「シヨウ」(26孟子 卷四 36丁表8行目)・「將」は本来「シヤウ」 |

- 17 臯陶 「コウヨウ」(26 孟子 卷四 62 丁表 4 行目)・「臯」は本来「カウ」
- 18 滕更 「トウコウ」(26 孟子 卷四 67 丁裏 7 行目)・「更」は本来「カウ」
- 19 滕更 「トウコウ」(26 孟子 卷四 68 丁裏 3 行目)・「更」は本来「カウ」
- 20 公望 「ホウ」(26 孟子 卷四 91 丁裏 5 行目)・「望」は本来「バウ」
- 21 亡滅 「ボウメツシ」(80 孟子 序 4 丁表 3 行目)・「亡」は本来「バウ」
- 22 陋巷 「ロウコウ」(80 孟子 序 5 丁表 5 行目)・「巷」は本来「カウ」
- 23 光耀 「ヨウ」(80 孟子 序 5 丁裏 7 行目)・「耀」は本来「ヤウ」
- 24 辞讓 「シセウ」(80 孟子 序 6 丁表 2 行目)・「讓」は本来「ジャウ」
- 25 荒亡 「コウ」(80 孟子 卷二 9 丁表 8 行目)・「荒」は本来「クワウ」
- 26 郊 「コウ」(80 孟子 卷二 10 丁表 5 行目)・「郊」は本来「カウ」
- 27 陶漁 「トウ」(80 孟子 卷三 26 丁表 2 行目)・「陶」は本来「タウ」
- 28 封疆 「キヨウ」(80 孟子 卷四 1 丁表 8 行目)・「疆」は本来「キヤウ」
- 29 申詳 「セウ」(80 孟子 卷四 17 丁裏 5 行目)・「詳」は本来「シヤウ」
- 30 郷 「ケラ」(80 孟子 卷五 11 丁裏 6 行目)・「郷」は本来「キヤウ」
- 31 守望 「ボウ」(80 孟子 卷五 11 丁裏 6 行目)・「望」は本来「バウ」
- 32 豪傑 「ゴウケツ」(80 孟子 卷五 19 丁裏 4 行目)・「豪」は本来「ガウ」
- 33 彭更 「ホフコウ」(80 孟子 卷六 6 丁裏 7 行目)・「彭」はそれぞれ本来「バウ」「カウ」
- 34 犀象 「サイソウ」(80 孟子 卷六 16 丁表 4 行目)・「象」は本来「ザウ」
- 35 匡章 「キヨウ」(80 孟子 卷六 19 丁裏 4 行目)・「匡」は本来「キヤウ」
- 36 沓沓 「トフ」(80 孟子 卷七 4 丁表 8 行目)・「沓」は本来「タウ」
- 37 笑貌 「ホウ」(80 孟子 卷七 18 丁裏 8 行目)・「貌」は本来「バウ」

② 開音を開音にした例

- 38 楊子「ヤウ」(26孟子 序3丁表6行目)・「楊」は本来「ヤウ」
- 39 情「シヤウ」(26孟子 序1丁表5行目)・「情」は本来「シヤウ」
- 40 氣象「キシヤウ」(26孟子 序5丁裏6行目)・「象」は本来「シヤウ」
- 41 于享「キヤウ」(26孟子 卷四 31丁表4行目)・「享」は本来「キヤウ」
- 42 毫髮「カウハツ」(80孟子 序5丁裏2行目)・「毫」は本来「カウ」
- 43 郊閔「カウクハン」(80孟子 卷二 4丁裏6行目)・「郊」は本来「カウ」
- 44 膠鬲「カウカク」(80孟子 卷三 3丁裏4行目)・「膠」は本来「カウ」
- 45 子敖「ガウ」(80孟子 卷七 23丁表6行目)・「敖」は本来「ガウ」

③ 合音を開音にした例

- 46 合従連衡「シヤウレンコウ」(26孟子 序2表4行目)・

「従」は本来「シヨウ」

- 47 堯「キヤウ」(26孟子 序2裏2行目)・「堯」は本来の音「ゲウ」
- 48 魯頌「シヤウ」(26孟子 卷二 61表5行目)・「頌」は本来「シヨウ」
- 49 王豹「ヒヤウ」(26孟子 卷四 32丁裏8行目)・「豹」は本来「ヘウ」
- 50 狗虺「カウテイ」(80孟子 卷一 6丁表7行目)・「狗」は本来「コウ」
- 51 勾踐「カウ」(80孟子 卷一 6丁表7行目)・「勾」は本来「コウ」
- 52 狗吠「カウベイ」(80孟子 卷三 4丁表8行目)・「狗」は本来「コウ」
- 53 溝壑「カウカク」(80孟子 卷五 8丁裏1行目)・「溝」は本来「コウ」
- 54 廢興「ハイカウ」(80孟子 卷七 9丁裏2行目)・「興」は本来「コウ」

④ 合音を合音にした例

- 55 凍餓「トウカ」(26孟子 卷一 15丁裏9行目)・「凍」は本来「トウ」

- 56 攻伐「コウバツ」(26孟子 序2丁表4行目)・「攻」は本来「コウ」
- 57 陋巷「ロウコウ」(26孟子 序5丁表5行目)・「陋」は本来「ロウ」
- 58 欧陽「ヲウ」(26孟子 序6丁裏3行目)・「欧」は本来「オウ」
- 59 溝壑「コウカク」(26孟子 卷二 31丁裏3行目)・「溝」は本来「コウ」
- 60 胸中「キヨウ」(26孟子 卷三 15丁裏8行目)・「胸」は本来「キヨウ」
- 61 陋巷「ロウコウ」(26孟子 卷三 40丁表8行目)・「陋」は本来「ロウ」
- 62 供「キヨウ」(26孟子 卷三 66裏7行目)・「供」は本来「キヨウ」
- 63 阜陶「コウヨウ」(26孟子 卷四 62丁表4行目)・「陶」は本来「エウ」
- 64 繩墨「ジヨウボク」(26孟子 卷四 67丁表1行目)・「繩」は本来「ジヨウ」
- 65 滕更「トウコウ」(26孟子 卷四 67丁裏7行目)・「滕」は本来「トウ」
- 66 滕更「トウコウ」(26孟子 卷四 68丁表3行目)・「滕」は本来「トウ」
- 67 憑婦「ヒヨウ」(26孟子 卷四 78丁裏7行目)・「憑」は本来「ヒヨウ」
- 68 陋巷「ロウコウ」(80孟子 序5丁表5行目)・「陋」は本来「ロウ」
- 69 溝壑「コウカク」(80孟子 卷二 21丁裏8行目)・「溝」は本来「コウ」
- 70 統「トウ」(80孟子 卷二 23丁裏3行目)・「統」は本来「トウ」
- 71 崩ヌ「ホウ」(80孟子 卷三 3丁表2行目)・「崩」は本来「ホウ」
- 72 憔悴「セウスイ」(80孟子 卷三 4丁裏7行目)・「憔」は本来「セウ」
- 73 麻縷絲絮「マロウシチヨ」(80孟子 卷五 21丁表2行目)・「縷」は本来「ロウ」
- 74 蠅蚋姑「ヨウゼイコ」(80孟子 卷五 23丁裏6行目)・「蠅」は本来「ヨウ」
- 75 丘陵「リヨウ」(80孟子 卷六 3丁表5行目)・「陵」は本来「リヨウ」
- 76 修大空「セウ」(80孟子 卷六 4丁裏6行目)・「空」は本来「セウ」
- 77 「陵」「リヨウ」(80孟子 卷六 19丁裏5行目)・「陵」は本来「リヨウ」

78 瞽瞍 「コソウ」 (80 孟子 卷七 26 丁表 5 行目)・「瞽」
は本来「ソウ」

以上、全78例のうち、①「開音を合音にした例」が37例、②「開音を開音にした例」が8例、③「合音を開音にした例」が9例、④「合音を合音にした例」が24例認められた。それぞれの用例数の違いについては、文章内容や角筆の書き入れの多寡と関わることはあるが、①「開音を合音にした例」が37例と最も多く存することから、開合の乱れが顕著であるといえよう。多くの開音は合音に移行していたとみられる。ただし、②「開音を開音にした例」が8例、③「合音を開音にした例」が9例見られることから、すべてが合音となっていたかどうかは疑わしい。このような例が、開合に乱れが生じた結果、表記において、本来の音が分からなくなり、合音であった字音の表記までも開音としてしまったのか、これら「合音を開音にした例」が発音を反映した表記なのかということが問題となる。前者であるならば、すでに近世後期から明治時代初期の安芸地方において、開合の変化はすでに完了していたことになる。この場合、「開音を開音にした例」は、知識を反映した結果の表記であり、実際行われていた発音を反映していないことになろう。後者であれば、開音から合音に一律に変化したのではなく、合音から開音に進んだ語もあり、また、開音を保ったままの語もあったということ

になる。これを解決するために、いくつかの観点から検討する。まず、同一の漢字の字音の表記について確認しておく。以下に挙げるのは、複数の用例があり、それぞれ音の表記が一致している例である。

〈開音を合音に〉 ○巷 (カウ↓コウ・3例) ○更 (カウ↓コ

ウ・2例) ○耕 (カウ↓コウ・2例) ○衡

(カウ↓コウ・2例) ○讓 (ジャウ↓ジヨ

ウ・2例) ○陶 (タウ↓トウ・2例) ○望

(バウ↓ボウ・2例)

〈合音を開音に〉 ○狗 (コウ↓カウ・2例)

〈合音を合音に〉 ○陵 (リヨウ↓リヨウ・2例) ○滕 (トウ

↓トウ・2例) ○陋 (ロウ↓ロウ・2例)

これらの例に対して、音の表記が一致していない例もある。

(各番号は、前掲の用例の番号である。)

3 郊関「コウクハン」「コウカン」(26孟

子 30 丁表 8 行目)

26 郊「コウ」(80 孟子 卷二 10 丁表 5

行目)

43 郊関「カウクハン」(80 孟子 卷二

4 丁裏 6 行目)

53 溝壑「カウカク」(80 孟子 卷五 8

丁裏 1 行目)

- 59 溝壑「コウカク」(26孟子 卷二 31
丁裏3行目)
- 69 溝壑「コウカク」(80孟子 卷二 21
丁裏8行目)

右の例のうち「郊」は、「コウ」と「カウ」という異なる読み
の例がある。3の「コウ」と読んだ例は26孟子の例で、43の
「カウ」と読んだ例は、80孟子の例である。26孟子と80孟子はい
ずれも、保田(義郎)家文書で、26孟子は、「孟子集註」(分類
番号 403-28-31)で、江戸時代中期の板であり、80孟
子は、「倭版四書 孟子集註」(分類番号 405・12-15)
で江戸時代中期の板である。角筆は、26孟子と80孟子は、角筆
を誰がいつ書き入れたか定かではないが、筆者はその字形から、
いずれも江戸時代後期の書入れと判断している。なお、26孟子
の角筆と80孟子の角筆は、異なる人物によって書き入れたもの
である。「郊」はもと「カウ」という開音であるが、26孟子と80
孟子の両方に合音の「コウ」の読みが見られることから、江戸
時代後期には、「郊」の音は「コウ」のように合音と認識されて
いたと見られる。また、80孟子で、「郊」に「コウ」と「カウ」
が見られるのは、同一人物でも「コウ」「カウ」と表記が揺れた
ことになり、これはすでに「郊」は「コウ」となっており、本
来の「郊」の音が分からなくなっていたことを示すのであろう。

43の「カウクハン」は、知識に基いて書き入れたと考えられる。
「溝」については、「カウ」と読んだ例と「コウ」と読んだ例
がある。「溝」の音は、本来「コウ」で、この読みを26孟子と80
孟子で書き入れている。しかし、80孟子では、「溝」を「カウ」
とも「コウ」とも読んでいる。これは、80孟子に角筆を書き入
れた人物が、本来「コウ」である「溝」の音を、誤った帰帰に
より「カウ」としたのであろうか。仮にそうだとすると、80孟
子で、「溝」を「カウ」とするのは、当時の「溝」の音を反映し
ていないことになる。80孟子には、「郊」を「カウ」と読む例と、
「溝」を「カウ」と読む例があることから、80孟子は、当時の発
音に基づくのではなく、開音を選んで書き入れる傾向があるの
かもしれない。次の例のように、本来「コウ」である「狗」を、
80孟子では、2例とも「カウ」にしている。

- 50 狗斃「カウテイ」(80孟子 卷一 6
丁表7行目)
- 52 狗吠「カウベイ」(80孟子 卷三 4
丁表8行目)

結局のところ、近世の安芸地方(広島城下)の開合について
は、確定的なことは言えなかったが、26孟子と80孟子の開音、
合音の読みの現れ方を見ると、江戸時代後期の安芸地方におい
ては、すでに開合の区別は失われ、開音は合音となっていたと

推定される。

(2) 合拗音と直音

合拗音の直音化については、安芸地方では、明治時代にはすでに直音化していたことは知られているが、その直前の時代の状態については、必ずしも明らかにされていない。

ここでは、保田(義郎)家文書の角筆文献から、近世後期の安芸地方(広島城下)の合拗音の状況について検討する。

まず、「合拗音を直音にした例」「直音を直音にした例」「合拗音を合拗音にした例」に分類して、用例を示す。

① 合拗音を直音にした例

79 郊関「コウクハン」「コウカン」(26孟子 30丁表8行目)
 「関」は本来「クワン」。角筆で「クハン」と書き、さらに角筆で「カン」と重書している。また、当該例のある行の上欄外に「コウカン」とある。「コウクハン」の文字と重書された「カン」の文字は同筆である。

② 直音を直音にした例

80 韓「カン」(26孟子 序2表5行目)・本来「カン」のどこ

ろを角筆で「カン」としている。

81 餓孚「カヘウ」(26孟子 卷一 14丁表4行目)・本来「ガ」のどこを角筆で「カ」(濁点なし)としている。

82 凍餓「トウカ」(26孟子 卷一 15丁裏9行目)・本来「ガ」のどこを角筆で「カ」(濁点なし)としている。

83 王赫トシテ「カク」(26孟子 卷一 30丁裏6行目)・本来「カク」のどこを角筆で「カク」としている。

84 含蕃「カン」(26孟子 序 5丁裏6行目)・本来「ガン」のどこを角筆で「カン」としている。

85 褐寛「カツ」(26孟子 卷一 5丁裏7行目)・本来「カツ」のどこを角筆で「カツ」としている。

86 耕稼陶漁「コウカトウ」「トウキヨ」(26孟子 卷二 23丁表6行目)・本来「カ」のどこを角筆で「カ」としている。

87 溝壑「コウカク」(26孟子 卷二 31丁裏3行目)・本来「ガク」のどこを角筆で「カク」としている。

88 飢渴「キカツ」(26孟子 卷四 59丁裏6行目)・本来「カツ」のどこを角筆で「カツ」としている。

89 革車「カク」(26孟子 卷四 72丁表4行目)・本来「カク」

90 韓「カン」(80孟子 序 2丁裏2行目)・本来「カン」のどこを角筆で「カン」としている。

91 圭角「ケイカク」(80孟子 序 5丁裏2行目)・本来

- 「カク」のところを角筆で「カク」としている。
- 92 含蓄「カンチク」「カンキク」(80孟子 序5丁裏3行目・本来「ガン」のところを角筆で「カン」(濁点なし)としている。
- 93 肥甘「カン」(80孟子 卷一 19丁裏3行目)・本来「カン」のところを角筆で「カン」としている。
- 94 葛「カツ」(80孟子 卷二 5丁表5行目)・本来「カツ」のところを角筆で「カツ」としている。
- 95 葛「カツ」(80孟子 卷二 19丁裏8行目)・本来「カツ」のところを角筆で「カツ」としている。
- 96 溝壑「コウカク」(80孟子 卷二 21丁裏8行目)・本来「ガク」のところを角筆で「カク」(濁点なし)としている。
- 97 楽正「カク」(80孟子 卷二 26丁表2行目)・本来「ガク」のところを角筆で「カク」(濁点なし)としている。
- 98 膠鬲「カウカク」(80孟子 卷三 3丁裏4行目)・本来「カク」のところを角筆で「カク」としている。
- 99 監「カン」(80孟子 卷四 13丁表7行目)・本来「カン」のところを角筆で「カン」としている。
- 100 溝壑「カウカク」(80孟子 卷五 8丁裏1行目)・本来「ガク」のところを角筆で「カク」(濁点なし)としている。
- 101 褐「カツ」(80孟子 卷五 13丁表5行目)・本来「カツ」のところを角筆で「カツ」としている。
- 102 嶽「ガク」(80孟子 卷六 11丁裏6行目)・本来「ガク」のところを角筆で「ガク」としている。
- 103 鶯「ガ」(80孟子 卷六 21丁表6行目)・本来「ガ」のところを角筆で「ガ」としている。
- 104 草芥「カイ」(80孟子 卷七 25丁裏7行目)・本来「カイ」のところを角筆で「カイ」としている。
- ③ 合拗音を合拗音にした例
- 105 廓「クハク」(80孟子 序 3丁裏7行目)・「廓」は本来「クワク」。
- 106 郊関「カウクハン」(80孟子 卷二 4丁裏6行目)・「関」は本来「クワン」。
- 107 裹「クハ」(80孟子 卷二 12丁裏3行目)・「裹」は本来「クワ」。
- 108 関識「クハン」(80孟子 卷三 20丁表5行目)・「関」は本来「クワン」。
- 109 王驩「クハン」(80孟子 卷四 10丁表2行目)・「驩」は本来「クワン」。
- 以上示したように、基本的にもともと合拗音の字音は合拗音で表記され、もともと直音の字音は直音で表記されている。こ

れは知識としての音を書き入れている可能性もあり、このことをもって、近世後期から明治初期にかけて安芸地方で四つ仮名が保たれていると判断することは難しい。

ただ、1例ではあるが、80の例では、合拗音の「関」に合拗音「クハン」と書いた上から、同筆で「カン」と重書して修正している。このことは、角筆を書き入れた人物が、もともと知識としての音を書き入れていたが、当時の発音が「カン」であつたことから、それを修正したのではないかと考えられる。そのように考えることが出来るならば、江戸時代後期においてすでに合拗音「クワ」の発音は、直音「カ」になっていたと推測できる。

なお、合拗音をそのまま合拗音にした例は、80孟子にのみ現れる。26孟子は、「クハン」を「カン」に修正していた。先に開合についても、80孟子のほうは、知識としての音を書き入れる傾向があることを述べたが、合拗音の場合も、80孟子に合拗音の例が多いのは、知識としての音を書き入れた可能性があるように思われる。

このように考えると、近世後期の安芸地方（広島城下）においては、すでに合拗音は直音で発音されていたと推定することができる。

(3) 四つ仮名

四つ仮名については、明治中期には、安芸地方において、完全に失われていたことが知られている。それより前、近世後期から明治初期ごろの安芸地方の状況について、保田（義郎）家文書の角筆文献から探ってみた。

以下、四つ仮名に関わる例である。

① 四つ仮名が保たれた例

〔音読み〕

- 110 温潤 「ジュン」(26孟子 序5丁裏6行目)・「潤」は本来「ジュン」。
- 111 諛辭 「キジ」(26孟子 卷二 11丁表6行目)・「辭」は本来「ジ」。
- 112 辭讓 「ジジヨウ」(26孟子 卷二 20丁表3行目)・「辭」は本来「ジ」。
- 113 尽心章 「シン」(26孟子 卷四 44丁表3行目)・「尽」は本来「ジン」。
- 114 繩墨 「ジヨウボク」(26孟子 卷四 67丁表1行目)・「繩」は本来「ジヨウ」。
- 115 辭讓 「シセウ」(80孟子 序6丁表2行目)・「辭」は本来「ジ」。

116 巡狩ト「シユンシウ」(80孟子 卷二 8丁裏4行目)・

「巡」は本来「ジユン」。

117 充虞「ジユウク」(80孟子 卷四 10丁裏4行目)・「充」

は本来「ジユウ」。

118 麻縷絲絮「マロウシチヨ」(80孟子 卷五 21丁表2行

目)・「絮」は本来「ヂヨ」

〔訓読み〕

119 築テ「キツ(キテ)」(80孟子 卷一 46丁表6行目)・「築」

は本来「キヅク」。

120 臂「ヒヂ」(80孟子 卷四 25丁裏2行目)・「臂」は本来

「ヒヂ」。

②四つ仮名が乱れた例

〔音読み〕

音読みについては、四つ仮名が乱れた例は見出せなかった。

〔訓読み〕

121 蹶ク者「ツマズ」(80孟子 卷三 9丁表5行目)・「蹶」

は本来「ツマヅク」。

122 親ラ「ミスカ」(80孟子 卷七 18丁裏8行目)・「親」

は本来「ミヅカラ」。

以上、用例を示したように、字音については、いずれの文献も、四つ仮名の乱れが生じていない。しかし訓読みについては、

四つ仮名が乱れた例が2例認められた。80孟子には、訓読みとして、四つ仮名を保った例が2例、四つ仮名が乱れた例が2例ある。これは、個別に語によって四つ仮名が保たれたり乱れたりしていたというよりは、四つ仮名はすでに乱れており、保たれているように見られる2例は、発音とは異なる知識音を書き入れたのではないかと思われる。字音について、四つ仮名が乱れた例がないのは、字音については、知識としての字音を書き入れたためではなからうか。よって、江戸時代後期の安芸地方では、四つ仮名の発音はすでに乱れていたと推定される。

(4) 音の交替

音の交替についても、いくつか例が見出せたので、以下、項ごとに例示する。

〔八行とサ行の交替〕

123 諛辞「キジ」(26孟子 卷二 11丁表6行目)・「諛」は本

来「ヒ」。

「ウ段とオ段の交替」

- 124 余裕 「ヨウ」(80 孟子 卷四 1 丁表 8 行目)・「裕」は本来「ユウ」。

「ウ段とイ段の交替」

- 125 糞カフテ「チ、(カフテ)」(80 孟子 卷五 8 丁表 6 行目)・「糞」は本来「ツチカフ」。

ハ行子音とカ行子音とが交替する例も、安芸地方の角筆文献に散見される。例えば、厳島神社御文庫蔵角筆文献には、「畏避」(イヒ)を「イキ」と読んだ例が見られる。キ、ヒいづれも、口蓋音であったとみられ、調音点が近いこのような交替が生じたのではないかと思われる。ただ、厳島神社御文庫蔵の角筆文献には、「破除」(ハチヨ)を「カチヨ」とする例もみられ、イ段とは異なる調音点のア段にも、カ行とハ行の交替例が見られる。この場合、調音点は必ずしも近いとはいえないので、音韻交替というよりは、ハ行を強く発音した場合にカ行で発音したように聞こえたという、聞き間違いを反映した書き入れである可能性がある。

125 は、「裕」の音「ユウ」が、前の字「余」(ヨ)のオ段の音

に引かれて、「ユウ」が「ヨウ」になった現象であろうか。126 の「ツチ(カフテ)」が「チチ(カフテ)」になったのも、後に続く「チ」の音に引かれて、「ツ」が「チ」になったのであるうか。ただ、音韻の交替例は以上示した例に留まっており、今回対象とした文献では、音韻の交替は、さほど顕著とは言えない。

(5) 「シユ」を直音「シ」にした例

- 126 蹴然トシテ「シク」(80 孟子 卷三 1 丁裏 5 行目)・「蹴」は本来「シユク」

「シユ」を「シ」と直音に表記した例も、中国地方の角筆文献に多数見られる。恐らく、近世後期から明治初期にかけて、中国地方で実際に「シユ」を「シ」と発音されていたのであるう。広島県立文書蔵の角筆文献にも、野坂家文書(安芸国加茂郡寺家村)に「祝」(シユク)を「シク」とした例や、「粥」(シユク)を「シク」とした例が見られる。⁽⁸⁾先に示した厳島神社の角筆文献にも、「熟ス」を「ジユクス」ではなく、「ジクス」とした例が見える。

「シユ」を直音「シ」にした例は、私が調査した安芸地方のみならず、備前地方、周防地方、北九州地方の角筆文献に数多く用例が拾えるので、江戸時代後期の中国地方や九州北部地方などの広範囲の地域において、広く見られた現象であろう。

おわりに

本稿では、二〇一六年から二〇一八年にかけて行った広島県立文書館での角筆調査の結果をふまえ、保田（義郎）家文書を対象に、近世後期から明治初期にかけての安芸地方の特に広島城下の方言的事象について考察した。特に、開合に関する用例が多く見出されたことから、開合の状況について特に重点的に考察した。いままで、広島県下から見つかった角筆文献を解説し、開合の状況について断片的に考察してきたが、この度の考察により、近世後期から明治初期の段階において、開合の区別はほぼ失われていたであろうという結論に達した。従来、安芸地方では、明治36年ごろには、すでに開合の区別はほぼ完全に失われていたことが分かるが、⁽⁹⁾少なくともその20年以上前には、開合の区別は失われていたと推定される。合拗音も直音になっており、四つ仮名の区別もすでに乱れ、ヂヅはジズと同音になっていたと考えられる。

今後、角筆資料の増加によって、より詳細な状況が明らかになるであろう。広島県立文書館には各家の古文書の蔵書量が豊富であり、引き続き角筆調査を進めていく予定である。

注

(1) 広島県立文書館での調査で、二〇一四年度十二月から二〇一六年度三月に確認された角筆文献については、『広島女学院大学論集』第六十七号（二〇二〇年 柚木靖史）で報告した。

(2) 保田家文書は、「広島市保田家 仮目録」（西村晃氏 執筆 2013年8月）によれば、広島市京橋町の豪商、保田家（縄屋分家「新宅」）に伝来した文書とある。また、「広島城下新町組稲荷町西組・京橋町年寄、広島第百四十六国立銀行頭取、広島銀行頭取など」を勤めた家であるともされる。収蔵までの経緯も、「平成8年（1996）5月22日、原蔵者から代理人を通じて寄贈。原蔵者は保田家の資料を保管していたが、広島銀行『創業百年史』編纂に当たり、同行へ貸与した。編纂終了後、原蔵者の所在が不明となったため、返却されないまま広島銀行で保管され、平成3年（1991）11月、広島銀行『創業百年史』編纂資料（199019）の一部として、他の資料とともに当館へ寄託された」とある。これによれば、原蔵者についての記載が無く、詳しいことは分からないが、保田家から広島銀行において保管されていたのを、そのまま広島県立文書館に収蔵された由である。したがって、本文書の角筆もまた、広島市京橋の保田家において書き入れられたとみてよからう。

(3) 広島県立文書館のホームページからの情報によれば、割庄屋、庄屋を営んでいたことが知られるが、現在、調査中であるとされる。広島県立文書館 平成11年度収蔵文書展「黒瀬町平賀家文書展」の資料によれば、「江戸時代の後半から幕末にかけて平賀氏が就いた役職は、居村上保田村の庄屋をはじめとして、隣村飯田村の庄屋、また、居村とは離れているが、上西条組と下西条組の割庄屋などである」と記される。

(4) 広島県立文書館のホームページからの情報によれば、庄屋を営み、村会議員もされた家であるとされる。現在調査中である。

(5) 広島県立文書館のホームページからの情報によれば、庄屋を営ん

でいとされる。詳細については不明である。「広島県立文書館収蔵文書展 広島県の市町村合併」(平成28年3月28日(月)から6月11日(土)開催)の資料によれば、「明治21年(1888)前後に賀茂郡白市村(現在の東広島市高屋町白市)ほか4ヶ村の戸長を務めていた」とある。

- (6) 文献番号26の書肆的事項については、拙稿「角筆文献資料から安芸・備後地方の近世方言を探る——広島県立文書館蔵の角筆文献調査(二〇一四年―二〇一六年)——」(『広島女学院大学論集』67号 二〇二〇年)に記した。
- (7) 拙稿「厳島神社の角筆文献」(『広島女学院大学日本文学』8号 一九九八年 42頁)
- (8) 注6の論文参照。
- (9) 『音韻調査報告書』(一九〇三年 国語調査委員会編)の第七條による。

〔付記〕

広島県立文書館での角筆文献調査に際し、同館研究員の方々には多大なる御厚情と便宜を賜った。また、本稿の作成に関わり特に西村晃氏に多くのご教示とご助言を賜った。成果公開の許可とともに、記して深謝申し上げる。

About the Feature of the Dialect Phoneme in Hiroshima:
Aki (安芸) Area in the Late 19th Century
—By the Material Survey in Hiroshima Prefectural Archives (2016–2018)—

Yasushi YUNOKI

Abstract

This paper is the report about the discovering Kakuhitsu (角筆) literature (2016–2018). I demonstrated that the distinguish of Kaigo (開合) had disappeared in the late 17th in Kakuhitsu (角筆) literature. And I pointed that 'Goyoon (合拗音) and Yotsugana (四つ仮名)' had disappeared too. In addition, I described that the feature of the dialect phoneme which is seen in the other Kakuhitsu (角筆) data is also seen the others.